

Title	スペンサー倫理学における「行動」の観点：「身体的観点」および「生物学的観点」
Sub Title	The views of behavior in Spencer's ethics
Author	久野, 真隆(Hisano, Masataka)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2021
Jtitle	エテイカ (Ethica). Vol.14, (2021. ) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20210000-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20210000-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# スペンサー倫理学における「行動」の観点

「身体的観点」および「生物学的観点」

久野真隆

## はじめに

本稿は、19世紀の思想家ハーバート・スペンサー（1820-1903）の著書である『倫理学のデータ』（*The Data of Ethics*, 1879）<sup>1</sup>において中心的に論じられている「行動」（conduct / behavior）の説明の観点について論じるものである。

スペンサーは科学的な基礎を持つ行動の規則を確立することを目指し、『倫理学のデータ』の約半分というかなりの紙幅を割いて、「行動」について論じている。

『倫理学のデータ』の前半部では、まず一般的な「行動」の特徴が論じられ（第1章）、そして次に「行動」の進化の仕組みが論じられる（第2章）。さらに「行動」に関して「善い行動」と「悪い行動」の特徴づけがなされる（第3章）。そして「行動」に関する善悪を判定する方法（第4章）について論じられている。

そして、第5章から第8章においては、スペンサーが「行動」の考察に用いた4つの観点、身体的観点（第5章）、生物学的観点（第6章）、心理学的観点（第7章）、社会学的観点（第8章）から眺めた行動についてが論じられている。

---

1 本稿では使用したものは Spencer, H. 1978 [1879-93]. *The Principles of Ethics*. 2 vols, In T. R. Machan ed. Indianapolis: Liberty Fund. に収録されているものである。

本稿では、その中でも、身体的観点（第5章）および生物学的観点（第6章）について精緻に読み解くことで、身体的観点、および生物学的観点から考察されるスペンサー倫理学における行動と道德の結びつきを明らかにすることを試みる。特に、挾本（2000）も論じているように4つの観点の中でこの生物学的観度の重要度は最も高いものである（挾本 2000, 247 頁）。これらの2つの観度を精緻に読み解くことで、スペンサーが科学的な基礎を持つ行動の規則を確立することを目指した「道德科学」の内容をあきらかにする。

## 第1節 身体的観度<sup>2</sup>

### 1・1 身体的観度の重要性

スペンサーはなぜ行動の「身体的観度」から議論を始めるのだろうか。そして、「身体的観度」から行動を眺めるとはどのようなことなのだろうか。スペンサーが問題視しているのは、我々が行動をすぐに心的用語に置き換えて、その動機に言及する傾向である。そのせいで、「触ったり、見たり、聞いたりすることによって認識される変化によって、行動が構成されているという事実に我々は気づかなくなってしまう」（*Ibid.*, 99）と考えている。そのためには、行動における心的側面に関わる「推論される要素」（*inferred elements*）ではなく、行動に関して直接「知覚される要素」（*perceived elements*）にのみ焦点を当てる考察を開始することが必要なのである。第5章「身体的観度」における自身の考察の目的を、スペンサーは以下のように述べている。

---

2 この節の議論は、『倫理学のデータ』、第5章「身体的観度」（*The Physical View*）（Spencer 1978, 99-109）に基づいて展開されている。

進化の観点に立ち、そして集合体 (an aggregate) が進化する間に、それを構成する物質だけでなく、その物質の運動も、不定形の一貫性のない同質性から明確な一貫性のある異質性へと移行すること念頭に置きながら、ここで我々は、行動がそのより高い形態へと上昇するにつれて、これらの特徴を次第に示すようになるのかどうか、そして、我々が道徳的と見なすその最高の形態に到達したときには、これらの特徴を最も大きく示さないのか示すのかを問わなければならない。<sup>3</sup>

ここにスペンサーが 1857 年に「進歩について」という論考の中で発表した彼の進化観を見てとることができる。スペンサーはこの論考の中で、有機的な進歩の法則こそ、一切の進歩の法則であると考え、地球の発達、生命の発達、社会、政府、工業、商業、言語、文学、科学、美術といった領域の発達の仕方を問わず、継続的な分化による同質から異質へという同一の進化が至る所に支配していると述べている<sup>4</sup>。スペンサーが 1879 年時点においても同質性から異質性への移行を進化と捉えていたことはこの箇所から明らかである。

## 1・2 魚・鳥・人間の行動における身体的観点

スペンサーはまず最初に、一貫性を高めるという特徴を扱う。あまり組織化 (organized) されていない生物の行動は、1つ1つの行動の連続性が弱いという点において、高度に組織化された生物の行動と大きく対照的であるとスペンサーは述べる。その理由は、動物が行うランダムな動作は、一瞬前に行われた動作とは全く関係がなく、直後に行われた動作に特定の方法で影響を与えることもないからである。たとえば、餌を求めて泳ぐ魚

---

<sup>3</sup> *Ibid.*, 99-100.

<sup>4</sup> Spencer 1857, 446-447.

の今日の動作は、異なる時間に異なる種類の獲物を捕らえるための調整によって、わずかではあるが定められた秩序を示すことはあっても、昨日と明日の動作とは無関係である。

しかし、鳥のような魚より発達した生物は、巣を作ること、卵に座ること、ヒナを育てること、そしてヒナが飛んだ後に助けることで、かなりの期間にわたって一貫性のある (dependent) 一連の動作を示している。さらに、巣の繊維を取って固定したり、食べ物を捕まえて子供に食べさせる際に行われる行為の複雑さを観察すると、結合された運動の中に、縦方向の一貫性 (longitudinal cohesion) だけでなく横方向の一貫性 (lateral cohesion) も発見することができる<sup>5</sup>。

そして、人間は、最も低次の段階でさえ、その行動の中ではるかに首尾一貫した運動の組み合わせを示している。来年の狩りに役立つ武器を作ったり、永続的に使用するためのカヌーやウィグワムを作るためになされる精巧な手の操作 (manipulation)、以前に受けた傷や与えた傷に関連する攻撃や防御の行為によって、未開人 (savage) <sup>6</sup>は集合的行為を示しており、その一部は長期間にわたって維持されている。

また、文明人においては、発達した行動のこの特徴は、さらに顕著になる。彼の仕事がどのようなものであれ、そのプロセスには多数の一貫した行動が含まれており、現在の行動と過去の行動、さらには遠い未来に予測される運動との間に関連性を示すように、日々の仕事が進められていると論じられている。

- 
- 5 スペンサーは縦方向の一貫性 (longitudinal cohesion) や横方向の一貫性 (lateral cohesion) という言葉を明確に定義して使用しているわけではない。ここで言及されている縦方向とは、世代を超えた種の行動の一貫性、横方向とは日々の生活における反復的行動の一貫性を表していると解釈できる。
  - 6 スペンサーは野蛮人 (brutes) と未開人 (savage) を区別し、前者よりも後者の方が、進化の度合いが高いとしている。詳しくは久野 (2019) の第2節第3項を参照のこと。

### 1・3 行動の一貫性と道徳

スペンサーは、魚・鳥・未開人・文明人の行動の一貫性について論じたのち、道徳的行動と不道徳的行動を次のように区別する。

私たちが道徳的と呼ぶ行動と、不道徳と呼ぶ行動とは、その構成要素の動作がより一貫しているかどうかで、大まかに区別されることに注意をして欲しい。(…)無秩序な行為で構成される低次の種類の行動は、その部分が互いに比較的緩い関係にあるのに対し、高次の種類の行動は、習慣的に一定の秩序に従うことで、(道徳的行動に)統一性と一貫性を獲得する。その行為が道徳的と呼ばれるものであれば、先行した行動と後続するの行動の間に比較的安定した関係が見られる。なぜなら、正しいことをするという事は、与えられた条件の下で、行為を構成する複合的な動作が、特定できる方法で続くことを意味するからである。(Spencer 1978, 101)

スペンサーは、ある行動が道徳的行動と呼べるかどうかは、行動の1つ1つを構成する動作が一貫しているのかどうかで判定されると考えていることがわかる。また、スペンサーは不道徳な行動を「墮落した(dissolute)」行動と呼び、道徳的な行動を「自制(self-restrained)」的行動と呼び、これを区別する。

スペンサーは道徳と行動の一貫性の例として、スペンサーはこれを「信頼可能性 / 信頼不可能性」(trustworthiness / untrustworthiness)という観点から説明する。ある人は、お金を払うかもしれないし、払わないかもしれない、約束を守るかもしれないし、失敗するかもしれない、本当のことを言うかもしれないし、嘘をつくかもしれない。これらの行動は「信頼可能性 / 信頼不可能性」(trustworthiness / untrustworthiness)を特徴づけるものである。「信頼可能性」のある行動は予見できるが、信頼可能性に乏

しい行動は予見できないということ意味する。そしてこのことは、一方を構成する連続した動作が、他方を構成する動作よりも、互いに一定の関係を持っていることを意味する、とスペンサーは考えている。

スペンサーは、「進化していない行動において、不明確さ (indefiniteness) が一貫性のなさに付随しており、進化した行動の段階を経て、行動を構成する動作の調整が次第に明確になっていく」(Ibid.,102)と考えているのである。

スペンサーの考察はさらに詳細に展開され、ポリプ、クラゲ、ミミズ、ミツバチ、魚、肉食動物、未開人、文明人という段階で考察が展開される。最も初歩的な原生動物が示すような形態の変化は、まったく曖昧で、正確な説明をすることはできない。そして、それより高度な種類の生物においては、部分部分の動作はより明確になるが、その部分部分の動作の結合性は、未開人や文明人よりも低いものである<sup>7</sup>。

というのも、人間の行動は、その最も低次な形態においても、単一の行動を形成する結合された動作においてではなく、様々な目的のために結合された多くの動作を調整する際にも、これらの生物と比べてはるかに大きな正確さ (definiteness) を備えている。たとえば、武器の製造と使用、そして野蛮な戦争における戦略 (maneuvering) においては、至近の目的

---

7 スペンサーによれば、ポリプのような腔腸動物では、部分が正確さを欠いた方法で動いているのを見ることができる。またクラゲの運動形態の1つには、彼らが無作為にとる進路に関しては、明暗の度合いが存在する光に向かって運ぶものとしか説明できないのである。また、昆虫では、危険を冒してあっちこっちに曲がるミミズの軌道と、花から花へ、あるいは巣へと飛んでいくミツバチの明確な進路との対比は、ポリプとクラゲの考察と同様のことを示している。ミツバチが巣の中に部屋を作り、幼虫に餌を与える行為は、連続した動作だけでなく、同時に行われる動作にもその正確さが表れている。魚が獲物を追いかけるときの動作はかなり明確であるが、それは単純な種類のものである。これは、肉食の哺乳類が草食動物を追い詰め、捕らえる過程で行う身体、頭、手足の多くの明確な動作とは対照的である。

に適応するために正確な数多くの動作が、未来における目的を達成するために、下等な生物の間では比較にならないほど正確に配置されている。

さらに文明人の生活は、この特性をはるかに顕著に示している。それぞれの工業技術は、各々の別な正確な動作の結果を例示しており、それらは同時かつ連続した順序で確実に配置されている。あらゆる種類の商取引は、行為を構成する一連の動作の間の正確な関係によって特徴づけられている。また、各人の日課はその期間と活動、休息、娯楽の量のうちに、放浪する未開人の行動では示されない、一定の配置を示している。というのも未開人は、狩猟、睡眠、摂食、またはいかなる種類の行動にも決まった時間がないのである。

スペンサーは、「道徳的な行為と不道徳な行為とは、これと同じように異なる」(Ibid.,103)と述べる<sup>8</sup>。そこから行動の結びつきの強さ、一貫性によって道徳的行為と不道徳的な行為を分けていると考えることができる。かくしてスペンサーは「行動の正しさへの進歩は、正しく釣り合いの取れた行動への進歩である」(Ibid.,104)という結論を導き出す。

#### 1・4 行動と動的均衡

スペンサーは以上の議論を経て、次の結論に到達する。それはすなわち、道徳的な行動の進化は、他の全ての進化と同様に均衡状態へと向かうというものである。

---

8 たとえば、スペンサーは以下のような例を挙げる。良心的な人は、すべての取引において正確である。指定された金額で正確な量を供給し、明確な品質を提供し、交渉した金額の全額を支払う。量だけでなく時間においても、業務上の契約であればその日のうちに、分単位で行う。また、正しさについても同様で、彼の発言は事実と正確に一致する。家庭生活においても同様である。良心的な人は、結婚契約に違反した場合に生じる関係とは対照的に、明確な夫婦関係を維持する。また、父親として、それぞれの子供の性質や機会に合わせて自分の行動を慎重に調整し、褒めすぎ、責めすぎ、報酬や罰則の少なさを避ける。

道徳的な側面において考察される行動の進化は、他のすべての進化と同様に、均衡にへと向かう。私は行動の進化が死によって到達する均衡に向かっていると言いたいのではない。死はもちろん、最高の人間の進化がすべての低次の進化と共通する最終的な状態であるが、私が言いたいのはそのような均衡ではなく、動的均衡に向かっているという意味である。(Ibid., 106)

これまでの議論において、生命を維持するということは、物理的な / 身体的な用語で表現すると、生命の維持を脅かす外力に直面した際に、内部の作用 / バランスの取れた組み合わせを維持することであることを理解し、そして、より高度な生命への進化とは、行動によって、その行動の一貫性を脅かす外力にますます完全に対抗する有機的適応の連続的な追加によって、より長い期間バランスを維持する能力を獲得することであることを理解した。これらの理解を踏まえ、スペンサーは次のように主張をする。

私たちは、道徳的と呼ばれる生命とは、この動的均衡の維持が完全になるか、または最も完全に近い状態になるものであるという結論に到達する。この事実は、組織化 (organization) が始まったときに漠然と現れた生理学的なリズム (physiological rhythms) が、組織化が進むにつれて、その種類がより多様になると同時に、より規則的になっていく様子を観察することで明らかになる。(Ibid., 106)

スペンサーが言う動的均衡とは、生物自身の内部作用と外部作用を調整していく中で到達する均衡状態であると考えることができる。また、スペンサーはこの動的均衡を、生物の組織化と生理学的なリズムから説明する。

周期性は、最も初歩的なタイプの内面および外面の行動にはほとんど見られない。低次の生物の場合では、環境の偶然性に受動的に依存してお

り、この場合生命活動の過程に大きな不規則性をもたらす。ポリプによる食物の摂取は、状況に応じて短いような長いような間隔で行われ、食物の利用は、生物の体の不規則な動作に助けられて、吸収された部分が組織内でゆっくりと分散されることによって行われる。例えば、劣等種の軟体動物は、血管系を持ってはいるものの、適切な循環はなく、粗い血液が血管の中を一方向に移動し、しばらくしてから反対方向に移動するというゆっくりとした動作しかしない。よく発達した構造を持つものだけが、リズムカルな脈拍と呼吸作用のリズムを持つようになる。その後、鳥類や哺乳類では、これらの基本的なリズムが非常に速く、規則的であり、その結果、生命活動が活発になり、そのために支出も多くなると同時に、消化活動のリズムにもそれと比べると規則性が確立され、活動と休息のリズムも確立される。このような段階から、相互依存のリズムによって特徴づけられる動作のある平衡は、それを乱す傾向のある作用をより多く打ち消すことによって、絶えず改善されていく。これは、野蛮人から文明人へ、そして文明人の中でも最下層の人から最上層の人へと登っていくときも同様である。内的行動のリズムを維持するために必要な外的行動のリズムは、同時に、より複雑でより完全なものとなり、それらはより良い動的な平衡状態になる。

## 第2節 生物学的観点<sup>9</sup>

### 2・1 生物学的観点と道徳

第6章「生物学的観点」はスペンサーの次のような文言から始まる。

---

9 この節の議論は、『倫理学のデータ』、第6章「生物学的観点」(The Biological View) (Spencer 1978, 111-136) に基づいて展開されている。

理想的な道徳的人間とは、動的平衡が完全であるか、あるいは完全に近い状態にある人間であるという事実は、生理学的な言葉に置き換えると次のような事実になる。それは理想的な道徳的人間は、あらゆる種類の機能が適切に作用している人間である。(Ibid.,111)

ここで、スペンサーは、前節で扱った身体的観点における人間の「動的平衡」を生理学上の用語に置き換え、「動的平衡」が完全であるということをして、「あらゆる種類の機能の適切な作用」に置き換えている。

ここで言及されている「動的平衡」ないし「あらゆる種類の機能の適切な作用」とは、直接的にも間接的にも、生命の必要性 (the needs of life) と何らかの関係を持つものであり、その根拠は、生物は内面 (身体的側面 / 生理学的側面) の行動を外側 (外部環境) の行動に適応させているという進化の結果にあると捉えている。したがって、それが正しい割合に到達していないということは、完全な生命にとって必要なものが欠けているということである。

そして、スペンサーは「あらゆる機能の遂行はある意味で道徳的な責務 (obligation)」(Ibid.,112) であると主張する。道徳はしばしば過剰に押し付けられたり、どのようなものであれ平均的な福祉に抵触するような生命活動を抑制することだけを求めていると考えられている。しかし、それだけではなく、こうした生命活動を通常の限界まで遂行することも道徳は私たちに要求しているのである。すべての動物機能は、すべての高次機能と同様に、その責務 (imperativeness) を担っているのである。したがって、私たちは「なんであれ生命力の充実度や活力を低下させるような仕方では身体を扱うことは不道徳であるという事実も認識しなければならない」(Ibid.,112) とスペンサーは主張する。

このように考えると、行動の1つのテストが生じる。すなわち、どのような場合でも、「その行動は、当面の間、完全な生命を維持する傾向があるか」、「その行動は、生命を最大限に延長する傾向があるか」という質問

が可能になる。これらの質問のいずれかに「はい」または「いいえ」と答えることは、暗黙のうちに、その行動が直接的な関係において正しいか間違っているかを分類することになる<sup>10</sup>。そしてスペンサーは、次のように述べる。

行動の進化が最終的にたどりつく最高次の行動、すなわち、完全な個人の生命を促進する行為が目的に対して完全に順応し、そして、その順応に子孫の維持と繁栄のための準備が伴い、他の人が同様の順応を行うことと両立するのみならず、それを促進しさえする。そして、この究極の形態の行動概念は、そのような行動を自然に生じる結果、すなわち通常の活動の産物として持つある性質の概念を含意している。(…)このような状況下では、機能が不足することも、機能が過剰になることも、最善の行動や完全に道徳的な行動からの逸脱を明らかに意味している。(Ibid.,113)

このスペンサーの結論は、すでに『倫理学のデータ』第2章「行動の進化(The Evolution of Conduct)」にて示されているものとほぼ同じであると言える<sup>11</sup>。スペンサーが想定している目的に対する行為の順応の最高の形態は、「生存闘争」が広がる自然界における、ある者の行為に対する目的の順応が別の者の非順応を想定するものではなく、すべての生物の目的に対する行為の順応が達成されるように生命全体に向けられているものである。そして、行動に関する最高次の形態とは、各々の個体が別の個体の順応を妨げることなしに成し遂げられるであろう目的に対する行為の順応がなされるような行動である。そのためには闘争がなくなった「恒久に平和な社会」を想定していた。

---

10 ここで考慮されているのは、直接的な関係のみであって、間接的 (remote) 関係については考慮されていない。

11 この詳細については、久野 (2019) 第2節第5項を参照のこと。

スペンサーが『倫理学のデータ』第6章で主張しているのは、「身体的観点」・「生物学的観点」から、このような目的を考えると、動的平衡の機能の適切さが、道徳的行為に関わるというものである。スペンサー自身もこの章での議論がとる視点に関して次のように述べている。

ここでは、道徳科学 (moral science) の研究の前置きに必要なのが、生物学 (biological science) の研究によって示されている。倫理学が扱う人間の生活の特別な現象を理解できると考えるときに、人間が犯す過ちについてもここで考えることができる。その過ちとは、人間の生活の一般的な現象にはほとんど、あるいは全く注意を払わず、生活全般の現象を全く無視してしまうというものである。また、有機的な進化において快樂と苦痛が果たした役割が明らかになるにつれて、生物の世界を知ることが、このような道徳家の一方的な考えを是正するのに役立つという推論が正しいということは確かである。(Ibid.,130)

スペンサーは、「道徳科学」の成立には、生物学の知見が必要だと考えていることがこの引用部からわかる。スペンサーはこの生物学の知見に依拠しながら、道徳を考えることの必要性を説いているのである。

## 2・2 進化と「快樂と苦痛」の関係

「生物学的観点」から、ないし生物学の知見を踏まえて道徳を考える際に、スペンサーは「意識」(consciousness) の状態をその領域に含めて考察している。一般に「意識」の状態の考察やその他精神状態の考察は心理学の領域に含まれるかもしれない。しかし、スペンサーの考えでは、精神状態とその関連性について言及する際に外的な作用とその作用間の関連性を考慮してはじめて、言い換えるなら主観的な精神状態のあいだのつながりと客観的な行動のあいだのつながりの対応関係を考えるときにはじめて、

考察が心理学の段階へと移行する<sup>12</sup>。

スペンサーは、「生物学的観点」からの考察では、「意識」が生じる前の生物の状態からの快樂と苦痛の考察を展開している。

行為と結果との間の適切な関連性は、意識が生じる前であっても生物の中で確立されなければならず、意識が生じた後は、これらの関連性がよりよく確立される以外に変化することはない。最初の段階では、生命は、それをもたらす行為の継続と、それを妨げる行為の回避によって維持される。感覚が付随して出現するときは常に、その形態は、一方の場合では生み出される感情が求められる類のもの、すなわち快樂であり、また他方の場合では避けられる類のもの、すなわち苦痛でなければならないのである。(Ibid.,115)

スペンサーが「生物学的観点」から行う快樂と苦痛の考察は、意識が生じる前の生命、つまり植物の状態からの考察を行う。この考察の目的は、前項引用部にも示した通り、道徳科学の研究の前段階には生物学の研究が必要であり、倫理学が人間の生活の一般的な現象を無視しているという問題意識、そして、また、有機的な進化において快樂と苦痛が果たした役割を

---

12 スペンサーの立場は、行動を生物学的な側面のもとで扱う際には、感情と(身体的)機能の相互作用を考慮せざるを得ないが、これはあらゆる発達した形態の動物の生命にとって不可欠である、というものである。なぜならば、生物の身体的変化の多くに伴う心理的变化は、2つの意味で生物学的要因となるからである。感覚(sensation)に分類されるこれらの感情(feeling)は、身体のコリ組みの中に直接与えられ、重要な器官の特定の状態に付随し、特に外的器官の特定の状態により顕著に付随している。スペンサーの理解では、感覚に分類される感情は、身体機能の遂行に協力的な影響を与えている。たとえば、恐怖は、逃避を促し、それに費やす力を進化させると同時に、心臓や消化管にも影響を与える。一方で、喜びは、それをもたらす行動の継続を促し、同時に内臓の機能を高めるのである。

明らかにすることで、道徳家の考えを是正するというものである。

スペンサーは、植物においても外的な作用そのものが組織に起こす変化は、こうした外的の作用の利用を促す変化であること指摘する。もし、植物の根が水分のある場所に向かって伸びるのではなく、そこから離れていくとしたら、あるいは、光によって同化できるようになった葉が暗闇に向かって曲がっていくとすると、植物は死に至ることがわかる。

また、この一般的な関係は食虫植物でも、ポリプのような意識のない動物性の生物においても同様であるとスペンサーは指摘し、そして意識ある生物に関しても、この関係性が変わることがないことを指摘する。

このような考察を得て、私たちは以下のような結論に到達する。

2つの方法で、快樂を与える行為と生命の持続ないし増加のあいだにある根源的な関係が存在していること、そして、またそこには暗黙に、苦痛を与える行為と生命の減少または喪失とのあいだにある根源的な関係が存在することが証明される。1つには、最も低次な生物の場合、自らに有益な行為とそれを行う傾向のある行為とは、もともと同じものの両面であり、それは死に至るという結果なしには切り離すことができない。またもう1つには、現存している発達した生物を考えると、それぞれの個体や種は、快いものを追求し、不快なものを避けることで日々生き続けていることがわかる。(Ibid.,118)

私たちが発見したのは、ある種類の、ある時間の、ある存在に対する快樂の意識が欠如している倫理の概念を組み立てることができないということであり、それは空間の意識が欠落している物体の概念を組み立てることが不可能であることと同様である。さらに私たちは、この考えが必然であることが感覚を持つ存在の本質に由来することと理解した。感覚的存在は、快樂を与える行為が生命を維持する行為であるという条件でのみ進化することができるのである。(Ibid.,118)

スペンサーは、植物から考察を始め、意識を持たない最も低次の生物、そして意識を持つ生物に関しては、快楽を与える行為と生命の持続ないし増加を見てとっている。この「生物」の本質により、感覚的存在は、快楽を与える行為が生命を維持する行為であるという条件でのみ進化することができるという事になる。そして、このような「生物学的視点」に立つと、ある種類の、ある時間の、ある存在に対する快楽の意識が欠如している倫理の概念を組み立てることはできないことが確認された。

### 2・3 「快楽と苦痛」と人間

スペンサーが快楽と苦痛をこのように「生物学的観点」から考察することにどのような意味があるのだろうか。それは、2・1節の引用部、および2・2節で示したように、有機的な進化において快楽と苦痛が果たした役割を明らかにすることで、道徳家の考えを是正するというものである。

スペンサーが是正したい道徳家の考えとは、労働に一般的に付随する不快な意識状態に先立って生じているある種の有益な結果の考慮をすることや、また、過度の飲酒がもたらすようなある種の快楽を受けた後に生じる有害な結果の考慮をすることなどの、苦痛を受けることは全体的に有益であり、快楽を受けることは全体的に有害であると、暗黙のうちに、あるいは公然と信じているというものである。スペンサーにとってこのことは「例外が規則を排除してしまうほどに彼らの精神に充満している」(Ibid.,119) ことに他ならないのである。

スペンサーは、快楽や苦痛、それらが感覚的なものであれ感情的なものであれ、適切な行為への動機付けや不適切な行為への抑止力として機能している事例は多く、また顕著であるのだが、これらには注目がなされず、人が直接または間接的にそれらに惑わされている事例のみ注目されていることを問題視している。本質的な問題に関してうまく機能している人は

無視され、本質的でない問題に関してうまくいっていない人のみが認識されていることに異を唱えている。

ここでスペンサーが引き合いに出すのが、2・2節で確認した快楽を与える行為が生命を維持する行為であるという条件でのみ進化することができるという主張である。スペンサーは、身体的な必要性に直接関係する、最も強い苦痛と快楽が私たちが正しい方向に導く一方で、生命の維持に直接は関係しない、より弱い苦痛と快楽が私たちが間違った方向に導くということになると、人間以下のあらゆる種類の生物で答えを出してきた快楽と苦痛の案内の仕組み (the system of guidance) は、人間ではうまくいかないということになると主張する。

道徳家からの想定反論として、有害な快楽と有益な苦痛を考慮している。前者には、大酒飲みやギャンブル好き、泥棒などが各々追求している快楽が挙げ、また後者には、自己犠牲的な親族、疲れを我慢する労働者、自分の道を守るために自分を犠牲にする正直者などを挙げる。この道徳家からの想定反論を、スペンサーは「この反論は快楽や苦痛による指導を全体的に否定するものではない。というのも個人個人の近接的な快楽や苦痛が、遠隔的で一般的な快楽や苦痛の考慮のせいで、軽視されているに違いないことをただ暗示しているに過ぎない」(Ibid.,120) と反論する。そして、スペンサーは、現段階においては、近接的な快楽と苦痛による案内が広範囲の事例で失敗していることを認めたのち、これらの異常は必然的で永続的なものではなく、偶発的で一時的なものであるという生物学が提供する解釈を提示する。

快楽と苦痛の案内が人間においてうまくいかないのは何が原因なのだろうか。スペンサーは、より劣った生物の中では快楽と苦痛が生命が進化し、自己を維持するための行動の指針となってきたことを示しながらも、それぞれの種の生存条件が時折変化してきたため、時折進化や自己の維持に必要なものに対して部分的に感情の適応が適切に行われず、再適応が必要になることを指摘する。スペンサーの分析では、この種のすべての生き

物に起こっている混乱の一般的な原因が、人間には普通ではあり得なくらい明白に、持続的に、密接に作用しているのである。

繰り返しになるが、スペンサーが行っている分析は、あくまで「生物学的観点」からの分析である。スペンサーは人間の生活様式の変化に注目し、そこから生じる変化について次のように考察をしている。森を歩き回り、野生の食物で生活していた原始人の生活様式と、文明社会の農家、職人、商人、専門家の生活様式とを比較すれば、一方によく適応していた身体的・精神的な体質が、他方には不適応であることがわかる。また、社会の進化の間に、強制的協働によって営まれる軍事的な活動に適した考え方や感情が、自発的協働によって営まれる産業的な活動に適した考え方や感情とどのように対立してきたかに注目しさえすれば、それぞれの社会の中には、これらの2つの異なる生活様式に適応した2つの道徳的性質の間の対立が常に存在しており、今も続いていることがわかる。軍国主義と産業主義のように、全く相反する2つの生活様式が共存している間は、人間の本性はどちらにも正しく適応できないのである、とスペンサーは主張する。

以上の理由から、日常生活において散見される快樂と苦痛による案内の失敗が生じる。では、人間における快樂と苦痛の案内の失敗は、行動のどの部分で最も顕著であるのだろうか。先に示したように、快樂と苦痛の感覚 (the pleasurable and painful sensations) は日々の生活に絶対に必要な身体的な要求に対してはかなりうまく適応している。栄養、呼吸、体温の維持などに関して私たちが促す感覚に従うことの利益は、付随する害悪をはるかに上回る。このような誤った適応が起こっているのは、原始人の屋外での生活から文明人がしばしば強いられる屋内での生活への変化によるものだろう。そして、さらにうまく機能していないのが、感情的側面の快樂や苦痛なのである。

## 2・4 「身体的観点」と「生物学的観点」

第1節で考察をしたスペンサーの「身体的観点」と本節で考察をしてきた「生物学的観点」は一体どのようなつながりがあるのだろうか。

スペンサーは2・3で検討したように、他の動物と比べて高度に進化した人間においては、生活様式が複雑化していることによる快楽と苦痛の適応不良が起こっていることを指摘していた。一方で、スペンサーは「快楽と苦痛は日々の生活に絶対に必要な身体的な要求に対してはかなりうまく適応している」(Ibid.,122)と考えている。また「栄養、呼吸、体温の維持などに関して私たちを促す感覚に従うことの利益は、それに付随する不利益をはるかに上回っている。社会で行われている生活に対してかなりの程度で適応ができていないのは、感情的な快楽や苦痛である」(Ibid.,122)と主張する。

スペンサーのこの主張は、換言すると、人間における快苦の感覚は「身体的観点」のみに注目してみれば外的なものとの適応度がかかなり高いが、「生物学的観点」から見ると快苦の感情はとりわけ社会生活に対する適応度が低く、再調整が必要というものである。

この「生物学的観点」から見た場合の、快苦の感情の再調整に対するスペンサーの基本的な考えは次のようなものである。

生物学的な観点から見ると、快楽と利益をもたらす行動のあいだのつながり、および、苦痛と有害な行動とのあいだのつながりは、感覚が存在し始めた際に生じ、人間に至るまでの生物の間で続いてきたものだが、そのつながりは人間においても、その性質のより低い、より完全に組織化された部分全体で一般的に示されている。したがって社会生活の条件への適応が高まるにつれて、その性質のより高い部分全体でますます完全に示されるに違いない。(Ibid.,122)

上の引用部において示されているのは、「身体的観点」から行動をみれば、その行動は、完全に組織化されたものであるが、「生物学的観点」から行動を見ると、その行動は快苦に対する適応の再調整が必要であり、それが完全なものになるためには、社会生活への適応度を高めていくことが必要であるというスペンサーの主張である。

さらにスペンサーは、生物にとって有益な行為とそうした行為の実行に付随する快樂および生物にとって有害な行為とそうした行為の回避に付随する苦痛のあいだにあるつながりを超えて、一般的な快樂と生理的高揚、一般的な苦痛と生理的抑圧のあいだには関連性があると述べる。つまり「すべての快樂は生命力を高め、すべての苦痛は生命力を低下させる。すべての快樂は生命に有利に働き、すべての苦痛は生命に不利に働く」(Ibid.,122)と考えているのである。

このスペンサーが主張する快樂と苦痛の一般的な観点は、スペンサーによれば従来の道徳家たちに欠けている観点である。

このような一般的な事実を認識していないと、道徳的な思索の大半は損なわれてしまう。習慣的枠組みにおける善悪の判断から、感情が行為者にもたらすこうした生理的効果は完全に除外されている。快樂と苦痛は、(…)受け手の身体に何の反応も及ぼさないと暗黙のうちに仮定されているのだ。(Ibid.,126)

以上の議論から、スペンサーと従来の道徳家の違いが明らかになる。スペンサーは道徳を考える際に、従来の道徳には考慮されていない、快樂と苦痛に関して生理学的 / 生物学的な視点を導入している。2・1節引用部で示したように、スペンサーが打ち立てようと模索している「道徳科学」には、「生物学的視点」、つまり人間の生活の一般的な現象に注意を払うことが必要不可欠なのである。

では、同引用部に見られる有機的な進化の視点についてはスペンサー

はどのように考えているのだろうか。スペンサーは、「身体的観点と同様に、生物学的観点は、進化の観点から一般的な行動を眺めることで得られる見解と一致する」(Ibid.,132)と考えている。「身体的観点」においては動的平衡と定義されていたものを、「生物学的観点」においては機能の均衡と定義する。この機能の均衡が意味するところは、諸機能が、その種類、量、組み合わせにおいて、完全な生命を維持し、構成するいくつかの活動に適応しているということであり、そのように適応していることは、行動の進化が継続して向かう目標に到達しているということである。

機能の実行に伴う感情に目を移すと、有機的生命の進化の過程では、必然的に快楽は正常な量の機能の付随するものとなり、一方、苦痛はなんでもあれ、機能の過剰と欠陥の付随物となったことがわかる。そして、どの生物種においても、(外的)条件の変化によってこれらの関係性に狂いが生じることが多いが、それらは常に元に戻るか、種が消滅するかのどちらかであることがわかった。

しかし、人類は身体の基本的な要求に関する感情と機能との間の調整を下等生物から受け継ぎ、日々、生命を維持するためのことを行い、すぐに死をもたらすことを避けるように強制されている感情によって、異常に大きな、そして複雑な条件の変化にさらされてきた。これにより、感覚による案内に大きな狂いが生じ、諸感情による案内はそれ以上に狂ってしまった。その結果、多くの場合、快楽は実行しなければならない行動とは結びつかず、苦痛は回避しなければならない行動とは結びつかず、逆になっ

てしまっている。

しかし、現在の道徳家たちは、人は感情と機能の間のこれらの関係がうまく機能していることを無視し、そこに見られる不調を何でも観察するようになっている。それゆえ、いくつかの快楽がもたらす悪が強調される一方で、快楽を受けることに伴う習慣的な利益は見落とされ、また、ある種の苦痛によって得られる利益が強調される一方で、苦痛がもたらす巨大な悪はほとんど考慮されていない状況に陥っている。

スペンサーはこのような曲解を特徴とする倫理理論に異を唱えているのである。このような倫理理論はスペンサーの言葉を借りれば、「人間の不完全に適応した体質が生み出す社会生活の形態の産物であり、それに適したもの」(Ibid.,133)なのである。スペンサーの主張は、適応が進み、能力と要求が調和へと向かうにつれて、このような不調和や、その結果としての道徳理論の歪曲は減少するに違いないというものである。

このような議論を経て、スペンサーは「生物学的観点」から眺めた場合の倫理学について次のように論じている。

生物学的な観点から、倫理科学 (ethical science) は、様々な自己保存活動、子孫を育てるために必要な活動、そして社会の福利が要求する活動が、適切な比率の取れた能力の自発的な行使において実現されるように、つまり各々が行動の際にその快樂の量を求めるようにそれぞれ構成されている、調和の取れた人間の、そして、結果として、これらの活動がなんであれその過不足が、直接のおよび間接的 (immediate but remote) な苦痛の量をもたらすように構成されている、調和の取れた人間行動を規定するものとなる。(Ibid.,134)

ここまでの議論で、スペンサーの構想する「倫理科学」/「道徳科学」の全容が明らかになった。スペンサーが構想している「倫理科学」/「道徳科学」は、快苦の概念に基づき、生命が進化してきたことを根拠に考察が開始され、「身体的観点」においては、快樂は正常な量の機能の付随するものとなり、一方、苦痛はなんであれ、機能の過剰と欠陥の付随物となった。しかし、「生物学的観点」における人間の諸感情の適応においては、人間の社会生活の複雑さゆえに、その適応が十分になされていないことが指摘された。この十分になされていない適応は、生物種においては(外的)条件の変化によってこれらの快苦の関係性によく混乱が生じるが大半は再適応されることから、適応がより進み、能力と要求が調和へと向かえば、

このような再適応は必要なくなるというものであると言える。

### 第3節 考察<sup>13</sup>

#### 3・1 スпенサーの快苦の概念

第1節・第2節の議論から、スペンサーの快苦の概念が明らかになった。スペンサーは生命に意識がなくとも、場合によっては植物にさえも快苦の概念を適応しているとさえ思われる記述がある。しかし、見てきたように、スペンサーの議論は下等動物から始まり高等動物へという議論に終始しており、基本的には、下等動物をはじめとする生物全般対して快苦の概念を適用していることがわかる。これは近年の生物学におけるタコや甲殻類にも痛覚があるなどの研究結果を鑑みれば、かなり先駆的な観察を行っていたと言えるだろう。

スペンサーの快苦の概念は、挟本(2000)<sup>14</sup>も指摘するように、生命現象全般に通用する概念であることにその特徴を見出すことができる。また挟本は、「スペンサーにおける快苦は、快楽が<生存に支障を来さないもの>であり、<苦痛が生存に支障を来すもの>であると換言することが十分に可能な、生物全般に通用する概念」(挟本 2000, 248 頁)であるとスペンサーの快苦の概念をまとめている。これはスペンサーの生物学的観点からの快苦の概念の考察としては間違いないだろう。

しかし、挟本は、「ここでスペンサーとベンサム流功利主義における快苦概念の差異を明確にしておくならば、ベンサム流功利主義において規定された快苦は人間を対象とし、(政府という主体によって)暗黙のうちにその判断基準が設定された概念である」(Ibid.,248)という評価を下して

---

13 この節の議論は、『倫理学のデータ』、第5章「身体的観点」(The Physical View) (Spencer 1978, 99-109)に基づいて展開されている。

14 挟本 2000, 247-248 頁。

いるが、この評価にはいささか問題があるように思われる。というもののベンサムは有感動物が快苦の概念を持つことを認めており、決して快苦の概念を人間だけに適用してはいないからである<sup>15</sup>。たとえば、ベンサムは、「功利原理」の適用される関係者の中に人間だけではなく動物を含めており、たとえ動物に理性がなくても、言葉を話せなくとも彼らの苦痛を考慮することの必要性を訴えている。確かにベンサムは、個人の道徳的行為にとどまらない、国家の政策や立法に至るまでの善悪の基準を判定する功利原理を考えてはいるが、その快苦の概念の関係者には有感動物が含まれていることをここで強調しておきたい<sup>16</sup>。

しかし、スペンサーの快苦の概念の理解は、進化論と結びつき、ベンサムの快苦の概念よりもその範囲が広いことは確かである。1・5で論じた「生理学的リズム」の獲得は、一見すると、スペンサーの勇み足のようと思われるかもしれないが、それは進化論的な視点と快苦の概念を併せて解釈することができる。この考察の背景には、2・4節で言及したように、有機的生命の進化の過程においては、どの生物種においても、(外的)条件の変化によってこれらの関係性に狂いが生じることが多いが、それらは常に元に戻るか、種が消滅するかのどちらかであるということを観察し、「身体的観点」における動的平衡と「生物学的観点」においては機能の均衡の観点から、完全な生命を維持し、構成するいくつかの活動への適応について考察し、行動の進化が向かう目標を明らかにしている。このような快苦の概念の理解は、スペンサー独特のものであり、確かにベンサムの快苦の概念とは一線を隠すものであると言えるだろう。

---

15 Bentham 1789[1996], 282-283 を参照のこと。

16 Bowler (1984) はスペンサーの功利主義を、ベンサム流の功利主義と自由放任主義というイギリスの伝統と、進化論で結合した進化論的功利主義と捉えている。

### 3・2 「倫理科学 / 道徳科学」と功利主義

このような快苦の概念を元に、スペンサーが考案したのが、「倫理科学」 / 「道徳科学」であった。「倫理科学」 / 「道徳科学」は、

- (1) 自己保存活動
- (2) 子孫を育てるために必要な活動
- (3) 社会福祉が要求する活動が、適切な比率の取れた能力の自発的な行使による実現

を目的としている。この「倫理科学」 / 「道徳科学」は言い換えるなら、スペンサーの進化論的倫理学であるとも言える。このスペンサーの進化論的倫理学に関しては、たとえば、内井（1996）が主張する「スペンサーは、結局、快楽説あるいは功利主義の倫理学に進化思想（実は進歩主義）の衣を着せて、『進化論的倫理学』とした売り出した」（内井 1996, 85 頁）つまり、スペンサーの功利主義は、進化論なしでも語れるものだという主張があるが、このスペンサー解釈は多少問題含みである。なぜなら、本稿の第1節・第2節の議論から、スペンサーが想定している快苦の概念は、生物全体に当てはまる概念であり、それは生物の行動を元に考察されていることが明らかになり、この独特の快苦の概念がスペンサーの功利主義の背後には控えていることを考察対象に入れる必要がある。児玉（2018）が主張しているように「スペンサーは初めて進化論を倫理学に本格的に適用し、功利主義的な倫理論を打ち立てよう」（児玉 2018, 53 頁）とした人物であると言える。本稿では、このようなスペンサーの功利主義解釈を進める際には、快苦の概念の適用領域の広さと進化論との関わりを考慮する必要があることを明らかにした。

## おわりに

本稿では、身体的観点（第5章）および生物学的観点（第6章）の読解を通じて、スペンサーの考える倫理学、すなわち「道徳科学」においては、快楽と苦痛に基づく行動と外的環境との適応の分析が必要であり、それが下等動物から人間に至る高等動物にも当てはまることを確認した。「身体的観点」においては、身体の基本的な要求に関する感情と機能との間の適応がなされていた。しかし、人間はその適応を下等生物から受け継いでいるものの人間においては、人間生活の複雑さのせいで、現在の快楽と苦痛の感覚による案内はうまく機能していないが、再適応しなければならない。スペンサーの解決策は、「倫理科学」を打ち立てることで、自己保存活動、子孫を育てるために必要な活動、そして社会の福利が要求する活動が適切な比率の取れた能力の自発的な行使において実現されるように、つまり各々が行動の際にその快楽の量を求めるようにそれぞれ構成されている、調和の取れた人間の行動を規定すればよいというものである。

本稿では、「身体的観点」および「生物学的観点」からみたスペンサーの「道徳科学」の内容について論じた。しかし、スペンサーの「道徳科学」にはまだあと2つの観点「心理学的観点」と「社会学的観点」が残されている。これらの2つの観点を踏まえたスペンサーの「道徳科学」の全容については稿を改めて論じたい。

## 文献表

- Bentham, J. 1789 [1996]. *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, Oxford: Clarendon Press.
- Bowler, P. J. 1984. *Evolution: The History of an Idea*. Berkeley, Los Angeles and London University of California Press. [P.ボウラー『進化思想の歴史』上・下巻、鈴木善次ほか訳、朝日選書、1987年]
- . 2009. *Evolution: The History of An Idea*. 25th Anniversary (ed.) Berkeley:

University of California Press.

児玉聡 2018 「スペンサーの進化倫理学の検討」『哲学研究』（京都哲学会編）603号、39-58頁。

Spencer, H. 1857. Progress: Its Law and Causes, *The Westminster Review*, Vol 67.

Spencer, H. 1978[1879-93]. *The Principles of Ethics*. 2vols, In T. R. Machan ed. Indianapolis: Liberty Fund.

内井惣七 1996 『進化論と倫理』世界思想社。

挟本佳代 2000 『社会システム論と自然』法政大学出版局。

久野真隆 2019 「ハーバート・スペンサーにおける行動概念」、『エティカ』（慶應義塾大学倫理学研究会編）12号、57-96頁。

（ひさの・まさたか 慶應義塾大学文学部非常勤講師）

## The views of behavior in Spencer's ethics

Masataka HISANO

In *The Data of Ethics* (1879), Spencer claims that the establishment of rules of right conduct on a scientific basis is a pressing need. In order to attain this object Spencer focuses his attention on the analysis of conduct (or behavior). Spencer discusses conduct (or behavior) from the four views: The Physical View (Chapter 5), The Biological View (Chapter 6), The Psychological View (Chapter 7), and The Sociological View (Chapter 8).

The main objective of this paper is to clarify the connection between conduct (or behavior) and ethics / moral in Spencer's ethics, as considered from The Physical View (Chapter 5) and The Biological View (Chapter 6). This paper analyzes Spencer's concepts of pleasure and pain through a close reading of

Chapters 5 and 6, and to clarify the content of Spencer's “moral science / ethical science” that is based on these concepts.